



随

想

わたしの鞆

エドゥアルト・
シュバイツァー

一つの講義の原稿を書くためには長い時間が必要である。それは、実際に講義が開始される日より数ヵ月先立って始められるのである。おびただしい資料が集められ、分類され、整理され、読破される。重要な点はノートに書きとられる。そしてこの分厚

いノートを前に瞑想の時が来る。浮び上がる問題点が徹底的に考えぬかれる。しかるのちに、骨身を削るような執筆の時が来る。

学期を通しての講義進行中にも、われわれはたえず多くのことを学ぶ。学生の質問や批判やかれらとの議論を通して、かれらの理解の方法や理解困難の様子などを通して、じつに貴重な発見が与えられる。もちろん、講義進行に応ずる新しい文献の読書と研究も、講義内容の充実のために不可欠である。わたくしのギリシャ語新約聖書にはたくさん白紙がいつもはさんであって、それぞれの個所に当るたびに与えられるデータが書き込めるようにしてある。また、わたくしのギリシャ語の辞典の欄外もそのような書き込みで一杯である。どちらにも書けない事柄は、カードに記入しアルファベット順にボックスに整理されている。二十五年の教師生活の結果、これらの講義の材料はまことにぼう大な量のものとなった。

今回同志社に来るにあたって、わたくしは予定されていた三つの講義のための数百ページに上る原稿の全部を郵送することは

しなかった。スイスを立ってインド、オーストラリア、香港をへて、三週間にいよいよ伊丹に到着したのだが、この間わたくしはいつもこの原稿の入った鞆を肌身離さず持って歩いたのである。夢にまで見た日本。わたくしは幸福感と満足感にみちて空港に降立った。くだんの鞆を手に提げて。

わたくしの旧友である神学部の方・コーラー教授夫妻と遠藤彰部長夫妻が出迎えてくれ、互いに久かつをじよする間にわたくしの荷物は手早く車のトランクに収納された。三週間の旅程中わたくしの手を離れたことのなかったあの鞆もいっしょに。

この夜、関西は大変な台風のまっただ中であつた。猛烈な雨の風と稲妻をついて空港まで迎えて下さった両夫妻の好意を感謝しつつ、わたくしは車の中で上気嫌であつた。しかし京都の宿舎に到着して、うしろのトランクの蓋が口を開けているのを見出したとき、わたくしはそんなに上気嫌にしていることはできなくなつた。鞆はどこを探しても見当らなかつたのである。

それから三日の間、苦痛と不安の時が続いた。遠藤、コーラー両教授は雨の中を探

しに車を走らせたり、伊丹から京都などの全所轄警察署に手配をしてくれたりした。しかし、三日間何の手掛りも得られぬままであった。さいごに、かれらは新聞に訴えた。京都、毎日、読売の三新聞が記事にしてくれた。ところが、あの台風の夜、一人の若い工員が大阪の関目のガード下でこの鞆を見つけていた。かれは家に持ち帰り奥さんと共に乾かし、翌朝城東署に届けていたのである。城東署は伊丹―京都のコースの外だったので電話手配は及んでいなかったため、持主不明のまま二日間空しく保管されていた。大阪府警の外事課員が鞆の内容の判読を依頼されたとき、かれは右の新聞記事を読んでいた！

四日目の夜、わたくしは城東署で親切な拾得者竹下敏雄さんに会った。そしてわたくしの感動を最高度に高めたのは、鞆の内容がほとんど損われずに戻ったことと共に竹下さんがわたくしの用意した謝礼をどうしても取ってくれなかったその真実な態度であった。たまたま鞆の中に入っていたマッターホルンの壁掛けを進呈し固い握手を何度もして別れたが、この素朴さと善意に

充ちた青年への感謝は、この事件のために心痛し同情しあらゆる策を講じてくれた友人、新聞記者、警官たちへの感謝と共に、この原稿によって講義をし著述をするときに絶えず新たにわたくしの胸によみがえることであらう。

(訳・遠藤彰)
(チューリヒ大学教授、神学部訪問教授)

東南アジアの 貧困と協同組合

仲尾 宏

東南アジアをまわってみて、この地域一帯に普遍的にひろがっている貧困について語らぬ人はいないであらう。たとえ数日間のおのぼりさんのような観光旅行を楽しんだとしても、観光客が訪れる名所や遺跡、また大きなホテルや空港には必らずといっていいくらい、つきものとなっている物乞いをするおびただしい人々の姿に心を痛めぬ人はいないにちがいない。ぼくはことしの七月にセイロンのヌワラエリヤでひらかれた協同組合セミナーに参加し、そのあと

女郎花

猿丸 葆光

(校友・猿丸元氏夫人)

女郎花高く月負ふ箱根山

肉あつき葉にこぼれつく花ハツ手

みかん食う口とがらすも一人旅

夜は夫にまつはり蹴けり火蛾と共に

夕焼の雲に消さるる遠花火

望遠鏡に傾き入りぬ若布巾

大徳寺

今年竹低き土塀も紫野

母の瞳が枯野を走り食堂車

一条の枯色走る母見舞

風花や海蒼ければ日もすがら

で東南アジアおよびインド、パキスタンなどの諸国を訪ねる機会をもったが、これらの国々について感想を求められれば、やはりまず貧困についてふれざるをえない。

とくにインド社会の恐るべき貧困と不潔無気力と乞食根性はおよそ現代の他の社会にはないにかがインドには存在すると思えないのである。たとえばニューデリーやボンベイの空港や駅には朝から深夜までおびただしい数の群衆がたむろしているが、ぼくは最初おろかにもそれらの群衆が時間まちをしている乗客だとはかり思っていた。しかし実はこの群衆は誰一人として住むべき家もなく、仕事もなく、また食事にさえろくにありつけない浮浪者の大群なのであった。汽車にのつて農村を通過すると、これはまた大都市以上に悲惨であつておよそ小さな子供という子供はほとんど素っ裸であり、僅かばかりの土や木でつくつた豚小屋同然の家が彼らの住まいであつた。そして、水牛や豚などの動物と人間とがその中でわずかに生きているというだけの状態で雑居しているのである。インド四億七千万の国民のうち、少くみつもつても

おそらくその三分の一は、このような飢餓線上をさまよっている人々であることはまづ間違いないものと思われる。

このインドほどではないにせよ、セイロンにしても、タイやカンボジアにしても消費物資の極端な不足、それも衣食住という人間が生きるための基礎的な資材の致命的な不足はおおいかくすことはできない。その原因の第一はいうまでもなく、資本不足による工業化の決定的なたちおくれである。ようやくにして政治的独立をかちとつたものの、先進工業国の発展の度合いから見るかに取残された時点で工業化をはじめすることは想像以上に大変な仕事である。ヒモつき援助をさけ、外国商品に国内市場をじゅうりんされることを避けようとするれば、極端な国内資本の保護政策をとらざるをえない。しかしその国内資本たるやインドをのぞいて他の東南アジア諸国はいまだに米やゴム、紅茶などのモノカルチャ的経済に依拠しており、外国資本に依存しない自国の工業化に役だちうる資本はどこにも存在しないのである。また、タイなどのように先進資本主義国に完全に市場をあけ

したところで、国内産業は依然としてふるわたわなしい、外国商品の洪水は外貨依存をますます強めるだけである。

第二は、政治的独立をかちとる以前からうけつがれている極端な貧富の差である。インドの金持は世界一の富豪であり、セイロンの独立運動の父であり、非同盟政策の忠実な実行者であつたバンダラナイケ元首の邸宅と農園ははくが日本でもかつてみたことのないほど宏荘であつた。

さらにインドについては国民生活のすべての秩序をいまだに支配しているカースト制の残渣とヒンズーの戒律をあげなければならぬだろう。

さて、東南アジアの協同組合運動はこのような状況のもとにあつて後進国からなんとか脱出しようとするこれらの国の指導者たちにとつて歓迎すべき運動であつた。農村はおろか都市にさえ有力な商業資本さえみあたらない、いわば資本ゼロのこれらの国では、わずかの協同資本によつて生産、供給活動がまがりなりにも進み、同時に人の組織化に役立っていくとすれば、これらの非資本主義的土壌の国々にとっては、

協同組合の活動はまさしく殖産興業の先端をいくものである。従ってセイロンでも、インドでも、またマレーシアでも、協同組合は国家権力のであつい保護のもとに、これらの国々の近代化達成のために大きな役割をはたしているのである。

一方、これらの国々で協同組合にはたらく若い人々はどういう人たちであろうか。セミナーに集った人々はいずれも若い人が多く、彼らのほとんどが独立後に整備されたそれぞれの国の一流大学を卒業し、ロンドンやハーバードに学んだことのあるエリートたちばかりである。そして彼らはなかば国家的使命をかんじて、なかば文部省の意向にそって協同組合運動にとびこんできたのであるが、その話しぶりからみるかぎり、彼らはいまの仕事に相当情熱をもち、とりくんでいるようにみえた。だが彼らは決してマルキストではなく、むしろ、イギリス労働党流の穏健な考え方をもっているように思えたのであるが、ただひとつ、気になったことは、これらの後進国の工業化という、われわれからすれば至上命令ともみえたテーゼにあまり熱心ではないので

ある。工業化以外にこれらの人口のみ豊富な地域を豊かな国々にかえるにはほかになんな方策があるのであろうか。工業化のものたらすひずみを警戒するあまり、モノカルチュアの産業の振興と協同組合方式による企業の民主的運営という彼らのえがいている夢だけでは、これらの国々の未来像はあまりにも牧歌的展望という感をぬぐえないのである。（昭和三五大法律・大学生協理事）

〃受付のおばさん〃

高木 勲

私が同志社に学んだのは、大正十二年から昭和二年の春までの五年間である。正しく四十年前のことである。私共の学舎は、今出川の東門よりの一角にあった。加えて、私の下宿が学校の東方に位置することが多かったため、自然、私の登下校路は、東門を通ることになっていた。いつのころからか、私は、学資を学校気分で送って貰うようになったので、その送金を東門の受

付で受取っていた。すなわち、私の生活の資金源とのコンセントの役を「受付のおばさん」がつとめてくれたのである。ただそれだけのことで、親しく話をかわす程のこともなく、従って、人柄に深くふれることもなかったが、この「受付のおばさん」が野崎昌さんだったのである。

受付の前を通りかかる時折に、「高木さん、お手紙ですよ」と優しく呼びかけられたことを昨日のことのようにつかしく思い出す。私の同志社生活の思い出は、実に、この「東門」から、いや、「東門のおばさん」野崎昌さんからたぐり出されるのである。

私は、在学時代の思い出のアルバムに「東門」写真を三枚張りつけていた。たまたま、住谷総長に校友会の北九州支部総会でお目にかかった折に、野崎昌さんを偲ぶ記念碑が建立されることを伺い、前記の東門の写真が何かのお役に立てばと願ったことである。東門の写真が、野崎昌さんを偲ぶことのよすがとなったことに、今更ながら思いを深くすると共に、故人の冥福を切に祈る次第である。

（昭二高商卒）